



▲高地蔵探訪ガイドブックの表紙  
([http://www.toku-milt.go.jp/river/river\\_index.html](http://www.toku-milt.go.jp/river/river_index.html))



◀東高原の南の地蔵



▲東中富の龍池の地蔵



▲国府日開の法光寺前の地蔵

## 背景

吉野川の下流域では、堤防の近くや道の四つ辻などに、台座の高いお地蔵さんが数多くあります。吉野川下流域は、土地が低く、たびたび洪水に見舞われていたため、人々は、お地蔵さんが水に浸かたり流されたりしては申し訳ないと思い台座を高くしたのです。このため、高地蔵の台座の高さは、その地区の洪水の大きさを示しています。また、これは洪水の恐ろしさを後世に伝えようとする先人からのメッセージでもあります。

## アクセス うつむき地蔵

- 名田橋南詰より西南西に直線距離約1.5km
- 徳島市国府町東黒田
- 緯度経度 北緯34度06分01秒, 東経134度28分58秒



吉野川下流域のかつての氾濫原<sup>はんらんげん</sup>では、俗に「高地蔵」さんと呼ばれている台座の高いお地蔵さんが堤防の近くや川岸のあちこちに多く見られます。この高地蔵は、先人たちの「洪水でお地蔵さんが水に浸かたり流されたりしては申し訳ない」という信仰心から、つくられたものと言われています。そのため記録的大洪水に見舞われた江戸後期から明治にかけて建立<sup>こんりゅう</sup>されたものが多くあります。

高地蔵の台座は、土地が低く、浸水が大きかったと考えられる場所では高くなっています。言い換えると、高地蔵が高ければ高いほど、その地区の水害は大きかったことになります。台座高がメートル以上の高地蔵が約一九〇ヶ所確認されています。このうち、最も高いものは徳島市国府町東黒田の「うつむき地蔵」で、全高四・一九メートル、台座高約三メートルもあります。このお地蔵さんが見おろしている辺りは、吉野川と飯尾川にはさまれたかつての洪水常襲<sup>じょうしゅう</sup>地帯であり、その高さから当時の氾濫水位がいかに高かったかがわかります。

お地蔵さんがある場所を地図上に記入してみると、吉野川下流域、しかも右岸(南岸)に多いことがわかります。これは下流域ほど洪水時の水位が高く、右岸(南岸)のほうが左岸(北岸)よりも地形的に低いため洪水常襲地帯になっていたことを反映したものと考えられます。

しかし、高地蔵が伝えているのは、それだけではありません。身近な高地蔵に供花や供物を捧げ、祀<sup>まつ</sup>ることによって、毎日の暮らしの中で、いつも洪水の恐ろしさを忘れることなく、水防への心構えをしていたのです。高地蔵は、四国三郎・吉野川と闘い、共に生きた先人たちが水の危険性を伝承してきた文化財なのです。



江戸



▲蔵珠院の茶室に残された洪水痕跡 (四国三郎物語より引用)



▲「寅の水」を記録した過去帳 蔵珠院所蔵 (四国三郎物語より引用)

### 背景

幕末の慶応二年（1866）に、阿波は天正13年（1586）の蜂須賀氏入国以来の大水と言われるほどの記録的な大雨に見舞われました。吉野川にほど近い徳島市国府町芝原の蔵珠院には、慶応二年の寅年の水の洪水痕跡とその凄まじさを伝えた過去帳が残されています。また、この洪水の恐ろしさを後世に伝えるため、平成7年（1995）には山門前に当時の水位を示す標柱が建てられました。

### アクセス 蔵珠院

- 第十堰南岸より南へ直線距離約1.5km
- 徳島市国府町芝原字宮ノ本3
- 緯度経度 北緯34度05分33秒, 東経134度27分47秒



慶応二年（一八六六）に吉野川が起こした洪水は歴史上最大の洪水で、幕末の動乱期に起きた前代未聞の大水害でした。

七月末から降り始めた雨は、次第に大雨となって、八月六日の夜まで降りしきり、つづく七日の夕方には古来まれな大水となりました。連日連夜の豪雨により吉野川の水量は膨れ上がり、第十の土手などが切れ、土地の高いところでも床上二、三尺（約六〇〜九〇センチメートル）、低いところでは天井に達するほどの浸水となりました。田畑は荒らされ、家や牛馬が多数流され、避難民は舟に乗り移りましたが、四方まるで海のようになり生死のほども知れず、ところどころに救助を求める声が哀れであったと記録されています。

この時の洪水の痕跡が、今でも蔵珠院に残されています。それは茶室と板戸に残されたシミで、それを見ると床上二尺（約六〇センチメートル）まで浸水していたことがわかります。蔵珠院が建つ土地は周囲の畑よりも高く、その分を計算すると浸水深は三メートルにもなります。

蔵珠院の過去帳には、この洪水により阿波の国中で三万七、〇二〇人の男女や牛馬などが溺死したことが記録されています。





▲龍蔵堤



▲「村々沼川堰留之図」の一部  
(国立国文学研究資料館所蔵)

## 背景

吉野川の第十堰の南側、徳島市国府町に芝原というところがあります。第十堰が造られる少し前、この辺りには一面に藍畑がひろがり、そこに住む人たちは、丹精込めて藍を作っていました。しかし、毎年のように吉野川が氾濫するので、家や牛馬は流され、せつかく耕した田畑も台なしになりました。そこで村の人々は人柱を立てて、堤を守ることを考えました。昔から人柱を立てると、川の怒りを鎮めることができると考えられていたのです。これは、庄屋さんへの恩返しのために、人柱になった龍蔵さんの話です。

## アクセス

### ほこら 祠と龍蔵堤

- 第十堰南岸より南へ直線距離約 1 km
- 徳島市国府町芝原 竜王団地北東端
- 緯度経度 北緯34度05分52秒, 東経134度27分29秒



第十堰が造られる少し前の話です。村の世話役たちが、庄屋さんを囲んで、どうしたら頑丈な堤がつくれるかを相談していました。それまで輪の中で、腕組みをしたまま考え込んでいた庄屋さんが、こういいました。「もう、こうなったら、人柱を川に入れるよりしようがない」「誰を人柱にするんか?」「明日の朝、いちばんに通った者を、人柱にしよう」庄屋さんはきっぱりいいました。こうして、川に人柱を入れて、堤を作りなおすことが決まりました。

その夜、庄屋さんの妻は、庄屋さんから次のようにうちあけられました。

「人柱には、私になる。私かなれば、みんなのためになると思うとつたんじや。明日の朝いちばんに出かけるけん、白装束を用意してくれ。どうぞ、あとのことはくれぐれもよろしく頼む」

ところが、この二人の話を聞くとはなしに聞いていた人がいました。龍蔵です。龍蔵は、日頃から職も持たず、庄屋さんの家から食べ物も分けてもらって暮らしていました。「えらいことになったもんじや。庄屋はんが人柱になるんやつて。あない偉い人を死なせたらあかん。わしが身代わりになる」

翌朝、村人たちが息をひそめて待っていると、白装束の遍路姿の男がやってきました。村人たちはいつせいにその男に飛びかかると、そのままかつき上げて、その男を川に投げ込みました。

すると、水音に混じって、男の声が聞こえてきました。

「庄屋はんによろしゅういうといて。龍蔵は喜んで身代わりになつたちゅうて」

ほどなくして、白装束に身を包んだ庄屋さんがやってきました。「龍蔵、礼を申すぞ。おまえの命はけつして無駄にはせん」こうしてできた堤防が「龍蔵堤」です。村人は近くに石の祠を建てて龍蔵をまつりました。この祠を「川贄さん」と呼んでいます。



印石とは、堤防の高さを記した石のことです。堤防の高さをめぐる川の兩岸の対立を静めるために設置されたもので、高さ一メートル程の所に線が一本刻まれています。

文化年間（一八〇四〜一八一八）に高畑村（現石井町藍畑付近）本村地区の人々は、吉野川とその支流である新宮川（現神宮入江川）の洪水による田畑の冠水かんすいを免れるまぬがため新しく堤防を築きたいと藩に願い出ました。しかし、隣の中州地区の人々から異議を申し立てられ、およそ四〇年間も堤防の築造とその高さをめぐって紛糾が続きました。

嘉永四年（一八五二）に郡代は本村・中州両地区の人々の言い分を聞き、双方納得の上で中州地区の土地の高さと同じ高さ約三尺余（約一メートル）の堤防を築くことで決着し、新しい堤防が完成しました。ところが、嘉永六年（一八五三）、本村地区の人々が中州地区に断りもなく、完成した堤防にさらに土を盛ったため、争いが発生しました。郡代は両者の話を聞いた上で、本村の人々に土を除去するように命じました。その上で、今後争いが起こらないようにと、石柱の上部に堤防の高さを示す線と「印石」という文字を刻み、その石柱を堤防の各所に埋めこみました。

このときの経緯を記した石碑が皇太神宮こうたいじんぐうという小さな社の横にあります。それは二一箇の印石を堤防の各所に埋設したと書かれています。そのうちの一つが平成八年（一九九六）に完全な形で発見され、現在石井町藍畑の産神社境内うぶに設置されています。



▲産神社の印石

### 背景

藩政期には、堤を築く際には、まず藩に願いを出して、村同士で話し合いをしなければなりません。しかし、村同士の話し合いは、利害が対立したままでとまらない場合が多々ありました。このため、無断で堤を築いたり、誰も見ていない隙を見て堤に土を盛ったり、反対にそれを削ったりという手段に訴えた結果、村ぐるみの紛争に発展することもありました。この争いが長引くと藩が調停に乗り出し、対立する村々の間で一定の取り決めをして決着をはかることもありました。

### アクセス

うぶ  
産神社

- 六条大橋南詰より南へ約700m
- 石井町藍畑
- 緯度経度 北緯34度05分47秒, 東経134度26分15秒





吉野川の近代の改修工事が始まった明治一八年（一八八五）から三年後にある出来事が起こりました。

明治二十一年七月三十一日、それまでの長雨の影響で吉野川は大洪水となり、石井町西覚門にしかくもんの堤防が決壊し、濁流だくりゅうが多くの民家を押し流しました。徳島県が吉野川の堤防工事のために事務所として使っていた家には、大きなモチの木が植えられていました。人々は濁流に流されまいとそのモチの木によじ登り、助けを求めました。その様子はまるでモチの木に人々が「鈴なり」になっているかのようなようであったと伝えられています。しかし、水の勢いはますます激しくなり、さらにモチの木に上流から流れてきた民家が引っ掛かり、モチの木は根元から倒れてしまいました。一瞬にして、木も人も濁流に押し流されてしまいました。

洪水の後、地元の住民は、この大惨害たいさいがいは県による堤防工事が遅れたことと、内務省の低水工事（沈床工）が原因であるとして、内務省の改修工事の廃止を県に働きかけました。（注：航行する舟や筏が沈床工に接触して、起ころうになったため、沈床工は舟筏を沈める恐ろしいものと、転覆したり、沈没する事故が相次いでいう誤った噂が広まっていたため、沈床工が洪水の原因とされた。）その結果、低水工事はわずか四年で中止されました。この出来事は、今でも「覚門騒動」として話が伝えられています。

現在、かつての破堤の場所には、大きく丈夫な堤防が築かれていて、かつての惨事を思い起こさせる痕跡こんせきは見あたりません。ただ、水害にあわないうようにとの思いから建てられた愛宕地蔵だけが、かつてモチの木のであつたあたりを見守っています。



▲愛宕地蔵



▲モチの木  
(徳島市国府の秋田邸)

### 背景

石井町西覚門にしかくもんの愛宕地蔵は、覚門騒動かくもんの証人です。明治時代の吉野川改修工事は、明治18年（1885）に西覚門から着手されました。西覚門の堤防が9割方完成していた明治21年（1888）7月31日に洪水が発生しました。この結果、堤防が369間（約664m）にわたり決壊し、人家78戸が押し流され、26名が亡くなりました。この水害を契機に覚門騒動と呼ばれる出来事が起こりました。亡くなった方を供養するために建立されたのが愛宕地蔵です。

### アクセス

#### 愛宕地蔵

- 高瀬橋南詰より南西へ直線距離約200m
- 石井町藍畑字西覚門
- 緯度経度 北緯34度05分49秒，東経134度25分25秒

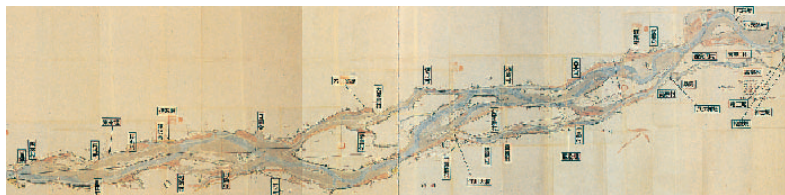




江戸



◀ 監物堤があった牛島地区  
(○印は稲垣神社)



▲ 吉野川絵図の一部  
(徳島県立図書館所蔵 四国三郎物語より引用)

### 背景

徳島ではよく知られる吉野川遊園地のある鴨島のまちには、吉野川、江川、飯尾川という三つの川が西から東に流れています。江戸時代には、吉野川がひとたび氾濫すると、この三つの川が一つの川のように流れていました。牛島村（現在の吉野川市鴨島町牛島付近）は洪水の時にはたびたび被害にあっていたところです。そこで村人たちは、岸之上というところに堤を築いて、吉野川の氾濫水の一部を飯尾川に放流し、被害を最小限にとどめていました。この話は、洪水から住民を守るために築堤に命を賭けた「稲垣監物」の行動を描いたものです。

### アクセス

#### 稲垣神社

- JR牛島駅より西南西へ直線距離約500m
- 吉野川市鴨島町牛島字中桑上473
- 緯度経度 北緯34度04分28秒, 東経134度23分33秒



宝暦年間（一七五一〜一七六三）に吉野川が氾濫し、大洪水により岸之上の堤防が崩れてしまいました。少しでも早く堤防を直さないと、またいつ吉野川が氾濫するかわかりません。しかし、その頃は農民たちが勝手に堤防を築いたり直したりはできませんでした。どんなに小さい堤防でも藩の許可が必要だったからです。牛島村（現在の吉野川市鴨島町牛島付近）の農民たちが困っているのを見て、藩に、堤防を補強したいと願った人がいました。稲垣監物という人です。監物は、堤防を直して、水を南の向麻山こうのやまの麓ふもとの方へ放流すれば、牛島村へ水が侵入するのを防げると考えたのです。しかし、藩からの許可はなかなか出ませんでした。その上困ったことに、この監物の計画に対して、向麻山の麓の上浦地区の村人が反対したのです。たしかに、よその村にできた堤防のせいで、自分たちの村に水が押し寄せてきてはたまったものではありません。藩からは許しが出ず、よその村からは反対される。それでも、牛島村は守らなければならない。監物はどんなに悩んだことでしょうか。

ある夜ひそかに、村の農民をすべて呼び出すと、一夜のうちに堤防を築いてしまいました。村人たちの喜ぶ姿を見て、監物はほっとしましたが、一緒には喜べませんでした。堤防が完成した朝早く、監物は堤の上ののぼると、そこで切腹しました。「村人たちに罪はない。私の一存でやったこと」という思いから、責任を一身に背負って死んだのでした。

完成した堤防は、土を掻き寄せたもので、高さ二・三メートル、延長九〇メートルほどでした。この堤防は、稲垣監物の名をとって、監物堤と言われるようになりました。



▲三王の碑



三王堤防の標識▶

## 背景

昔、吉野川上流の貞光付近の吉野川の流れは、今とはかなり違っていました。貞光辺りでは、吉野川は西崎から二手に分かれ、一方は南を流れ、もう一方は北を流れ、江の脇で合流していましたので、今の貞光のまちの北半分は水の底にありました。このため、雨が降り洪水が発生すると、濁流が沿岸を洗い、住民の被害は甚大だったと言われています。この話は、住民のために築堤を始めたものの、工事に関して住民に過重な労役を課したために訴えられて自害した代官の話です。

## アクセス 三王神社

- 美馬橋の南詰からJR貞光駅方向に100m程行き、右手の山への小道を100m程登る
- つるぎ町貞光字西山
- 緯度経度 北緯34度02分28秒、東経134度03分14秒



貞光の代官原喜右衛門は、吉野川の氾濫から住民を救うことを決意し、底幅八間（二間は約一・八メートル）、天幅三間、高さ二間半、長さ二百八十八間の堤防を築造する工事にとりかかりました。明暦年間（一六五五〜一六五七）のことです。

しかし、着手してみると予期せぬ困難が続出しました。難工事のため仕事を捨てて逃げる人夫が多くなりました。また、予定以上に工費がかさみ、その金策もつなくなりました。このため、代官は私財のすべてを投げ出し、しばらく工事は順調に進みましたが、その金も底をついてしまいました。ついには工事の完成をあせって近辺の村々にお触れを出し、連日農民を無償で工事にあたらせました。苦しさに耐えかねた農民はその困苦を藩主に訴え、結局、代官は役所を追われる身となりました。

役所を追われた原喜右衛門は、西崎山の平らな石の上に座して眼下に流れる吉野川に目をやりました。すみきった水、まさに完成に近づいている工事現場も一望の下にあります。無量の感慨をこめて静かに用意した九寸五分（三〇センチメートル弱）の短刀を右手に左の脇腹につき立て一文字に引きました。供をしきた二人の家来も追腹（家臣が主君の死のあとを追って切腹すること）を切りました。

今日では、三人は堤防建設により貞光の発展を築いた三人の義人として、吉野川を見下ろす三王神社に祀られています。



▲現在の吉野川の水防竹林（東みよし町三加茂）

水防竹林は、三好市池田町付近から下流吉野川市川島町にかけての吉野川中流域に多く残っています。その規模は日本一であると言われています。かつて吉野川の両岸には、幅広く大規模な竹林が万里の長城のように連なっており、戦前、徳島本線は竹の美林に沿って走る鉄道として有名で、その美しさは日本一と称されていました。

藩政時代には、財政的な理由などから吉野川の洪水を制御できる規模の堤防を築くことができませんでした。このため、徳島藩は沿川部や堤防に竹藪の植え付けを奨励しました。明治三年（一八七〇）の徳島藩「郡中制法」にも、「堤防川岸などへは柳呉竹などを植え、出水の節は囲に相なるべく常々心配りを遂ぐべきこと」と定め、竹林等の造成、保護につとめていました。現在の見事な美林の三加茂（現在は東みよし町）の竹林は、明治三二年（一八九九）の洪水によって村が大きな被害をこうむったさい、三庄村（現在の東みよし町三加茂）の村長が村の有志から寄付金をつのって、延長八二〇メートル、幅一八メートルにわたって植林したのが始まりです。成長し地下茎のからだんだん竹林は水害防備林と呼ばれ、洪水による浸食から川岸や堤防を守りました。また、洪水の水勢を弱め、岩や小石が耕作地に流入したり、家屋が流失したりすることを防ぐ役割を果たしました。

かつて水防竹林の竹材は物干し竿、釣り竿などにも利用されました。また、竹尺や和傘の原料となり、明治から昭和にかけて竹林を利用した地場産業の発達をもたらしました。今日では竹の需要が少なくなり放置された竹林が多くなっていますが、かつて川沿いの人々は、洪水被害を緩和するとともに、その利用により収益をあげることができた水防竹林を大切に育み、守ってきました。

水防竹林は吉野川を彩る風物詩であり、洪水と闘う流域住民の知恵でもあります。

## 背景

暴れ川四国三郎の異名をもつ吉野川は、藩政時代には財政的な理由などから堤防で守ることが困難であったため、吉野川沿いに竹林の植え付けが奨励されました。吉野川の堤防が整備されるにつれて、かつて緑の堤防のように連なっていた水防竹林は下流部ではその役割を終え、少なくなってきました。しかし、今日でも中流部では竹林が連なり、吉野川の洪水から地域を守るために役立っています。この話は、築堤が許可してもらえなかった時代に、次善の策として緑の堤防と言われる竹林の植付けを行った先人の知恵を描いたものです。

## アクセス

### 西庄地区水防竹林記念碑

- JR三加茂駅より南西へ直線距離約1 km
- 東みよし町西庄山田69 八柱神社境内
- 緯度経度 北緯34度02分09秒, 東経133度56分23秒







▲島づかり (無堤の吉野川上流域)



▲昭和29年洪水

## 背景

最近まで洪水のたびごとに水に浸かっていた吉野川上流地域では、浸水時の知恵が伝えられています。例えば、三好市池田町シマ地区も地盤が低い地域であり、昭和50年(1975)に池田ダムが完成するまでは頻りに浸水していました。このため、地域の人々は、浸水した時に被害を軽減するよう対応する術を身につけていました。今日では浸水時の知恵が忘れられがちですが、シマ地区の古老の話は、浸水への備えや心構えを教えてください。

## アクセス シマ地区 (県立三好病院周辺)

- JR池田駅より東へ約1.5km
- 三好市池田町シマ815
- 緯度経度 北緯34度01分42秒, 東経133度49分04秒

三好市池田町シマ地区は、昭和五〇年(一九七五)に池田ダムが完成するまでは、洪水のたびごとに頻りに浸水していました。川の水が急に増して来て、半鐘が打ち鳴らされると、各家ごとに荷役を始めました。まず下の物から取りかかれと、石炭箱などを並べ、畳の上に積み重ね、履物など下の物全部その上へ上げます。そして、雨戸を締め「ツツカイ」をします。家に押し寄せてきた水の水圧で雨戸が弓のようになり、はずれるのを防ぐためです。雨戸がはずれると、家財道具が一瞬にして押し流されます。半鐘は夏には四、五回耳にしました。

昭和二九年(一九五四)九月の大水の時は、水位が床上一メートル以上もあつたように記憶しています。階段三段目から小便をたれ流したことを思い出します。このような大水は、出水も早いですが、引くのも早いです。引きかけたら家の中に水がある内に、流れてきた泥・雑草などを押し流し、洗い流します。これと忘れると、後で大変面倒になり、手間がかかるのです。出水時には、親戚や知人が馳せ参じ一生懸命手伝ってくれますが、いったん家の中の水が引くと、家族だけで後始末をせねばならず、とても重労働でした。壁は流され、竹で組んだ骨組みばかりで、夜ともなれば隣から隣へと見透しで、提灯やローソクの光で後かたづけするのは淋しく、哀れでした。子供心にも天気が続けばと、そればかり祈っていました。不潔な泥水にびしょ濡れになった物ばかりで、不衛生この上ありません。町役場の配慮で消毒が行われ、平常どおりになるのに一ヶ月ぐらいはかかったと思います。



「月夜にひばりが足を焼く」。ひでりが続くと、夜、木々の枝にとまったひばりが足を焼くほどに地表が熱く熱せられている様子が表現されています。

昔、三好市、阿波市などでは、吉野川沿いにありながらも、田畑が河岸段丘の上にあるために、平地の底を流れる吉野川の豊かな水を利用することができませんでした。このため、ひでりが続くと、干ばつに苦しめられてきました。資金や技術が十分ではない時代に、人々ができることは神様をお願いすることでした。

旧池田町では農民が八幡神社に集まって、雨乞いの祈とうや踊りをしました。大きな「はんぼう」(底の浅い大きな飯びつ)に水を満たし、そのまわりに、みんなで、蓑笠姿で集まり、神官がお祈りの神事をした後、はんぼうの水を笹の葉に付けては散らしながら、歌い踊り回りました。水がなくなると、うちわを持った者と入れ替わり、前後にふりながら、炎天下に何時間も踊り続けたものです。

その時、みんなで歌を歌いました。その一節に「六月やひでり続きで、ほこり立つ」という句があります。



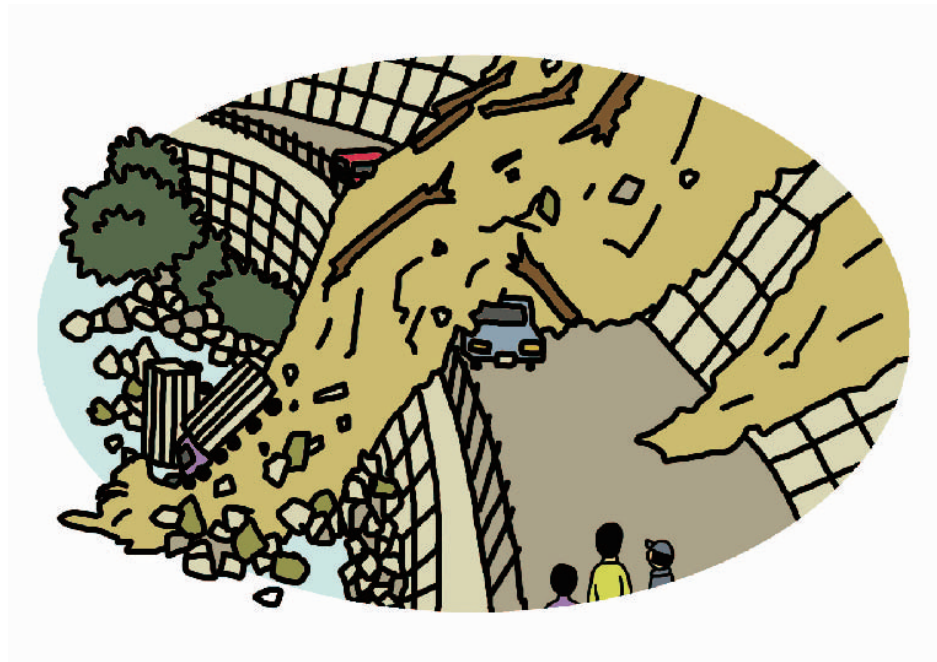
### 背景

明治から大正にかけて、三好市では夏がくると毎年のように干ばつが続き、三年に一回ぐらいは、とうもろこし・たかきび・あわ・こきび等が畑で黄色くなり、田は亀の甲のようにひび割れて、大きな被害を受けていました。この頃は、灌漑用水として、馬路川や馬谷川から水をとっていましたが、夏になると水量が少なくなり、高台などでは、飲料水の井戸や湧水も枯れてしまい、手のほどこしようがありませんでした。このため、農民は雨乞いをして、神様に雨降りの祈願をしました。

### アクセス 八幡神社

- JR阿波池田駅より西南西へ直線距離約2 km
- 三好市池田町白地
- 緯度経度 北緯34度01分01秒, 東経133度46分48秒





## 背景

昭和62年（1987）7月、徳島県三好市山城町の国道32号で土石流が発生し、車両4台が被災しました。この災害は、トラック2台が土石流の直撃を受けて吉野川に転落、乗用車1台は路上に埋まり大破し、ライトバン1台は路上を流され川側のガードレールで止まり吉野川への転落は免れるという災害でした。しかし、車両運転者等の適切な避難行動により、奇跡的に人身被害は発生しませんでした。

## アクセス 災害現場付近（国道32号の距離標81/8）

- JR大歩危駅より南南東へ直線距離約3km
- 三好市山城町下名
- 緯度経度 北緯33度51分13秒，東経133度47分14秒

昭和六十二年（一九八七）に国道三二号で土石流に遭遇した人の体験談です。  
七月一四日午後九時頃、三好市山城町の国道三二号の現場付近一帯は、梅雨前線による集中豪雨のため土砂降りでした。

高知から高松に向かって走行中のライトバンが、豪雨により山側斜面から流出していた土砂にタイヤを取られて脱出できなくなりました。同乗者が車外に出て後続車等に応援を依頼し、これに応じた後続のトラックと対向車線を走行していた乗用車及びトラックが路上に停車し、運転者や同乗者が救出応援に向かい、車両を押しやりました。

その時、乗用車の運転者は、路面を流れていた流水の色が赤く変わり、斜面の上部でバリバリという木々が裂けるような音が聞こえたため、とっさに危険を感じ、全員に池田側に逃げるように指示をしました。すると、その直後に山側からの大量の土石流が上り線側のトラックを直撃し、トラックは吉野川に転落し、ライトバンは運転者が車内に残されたまま土砂流により路面上を滑走し、川側のガードレールで止まり、運転者は脱出しました。

車両四台の搭乗者（計八人）は、車両を現場に残したまま現場を離れ、山城町駐在所に災害発生を通報しました。その後、次の土石流が発生し、下り線に停車していた乗用車とトラックを直撃して、乗用車が埋まり、トラックは吉野川に転落しました。

流水の色の変化と木々が裂けるような音に危険を察知できたことが、車両四台が被災した大災害にもかかわらず人身被害が皆無という奇跡的な結果をもたらしたのです。



▲蛭子神社の百度石



▲百度石の裏面に刻まれた碑文(拓本)

## 背景

徳島市南沖洲の蛭子神社境内に、百度石があります。百度石は、子どもが病気になった時や家族に不幸が訪れた時などに、願いがかなうようにお百度を踏む(100回お参りをする)際の起点となる石です。多くの方が何度も何度も目にする蛭子神社の百度石に、安政南海地震のことが記されていました。石の風化がひどく、今では判読できる碑文は限られていますが、「徳島市史」や「蛭子神社記」、「阿波における地震の研究」から碑文の内容が分かります。後世の人に津波の教訓を伝えたいという思いが伝わってきます。

## アクセス 蛭子神社

- JR徳島駅より東へ直線距離約3.5km
- 徳島市南沖洲1-2
- 緯度経度 北緯34度03分59秒, 東経134度35分05秒

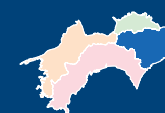


南海地震は、江戸時代以降でも、慶長九年(一六〇五)、宝永四年(一七〇七)、嘉永七年(一八五四)、昭和二十一年(一九四六)というように、周期的に起こってきました。この南海地震の周期性を後世に伝えるために、人々はさまざまな工夫をしてきました。

徳島市の蛭子神社では、百度石に南海地震の周期性が記されています。今日では石の劣化がひどく、判読できる碑文は限られていますが、以下のような内容が記されていました。

……嘉永七寅年十一月五日、大地震が起こりました。人々はうろたえて、木や竹の根が絡む藪の中に駆け込み、津波が来ると騒いでいました。舟に乗って流され、危ういところを助かる者もいれば、舟が転覆して命を失う者もありました。舟に乗ってはいけません。家が潰れて、こたつやかまどから出火して、多くの家や蔵が焼けてしまいました。こういう時には心を鎮め、火の元に気を付けることが大切です。ももとせ(百年)しないうちに、このような地震・津波がやってくると言われていきます。……

「ももとせ(百年)を経ぬほどにはかような震瀟有り」と刻まれた碑文は、南海地震の周期的な発生を予測し、警鐘を鳴らしています。まさしく嘉永七年(一八五四)から百年経たない昭和二十一年(一九四六)に南海地震が起こり、昔からの言い伝えを尊重することの重要性を証明しています。



昭和二十一年（一九四六）の南海地震の時に、河川に浸入した津波の速さを徳島の津田で体験した人の話です。私は、当時徳島の津田で製材所を営んでいました。明け方、大きな地震がありました。とっさに「津波が来る」と思った私は、両親と妹たちをいそいで裏山へ避難させました。しかし、私はどうしても川につないである材木が心配でなりませんでした。材木の様子を確かめるために川へ出かけました。その時私は津波のすさまじさを目の当たりにすることになりました。

川の水はザーツともすこい勢いで海側の津田の防波堤の方まで引きました。普段なら五〇メートル以上もある川幅が、水が引いたせいで帯のようにわずか一間（約一・八メートル）に満たない川幅になりました。その後、引いた波はものすごい速さと勢いで川を逆流し始めました。その水の速さといったら、その頃の私が全力で走っても到底及ばない速さでした。

川につないであった材木は波にのまれてしまいました。とうとう津田橋の橋桁に材木が轟音とともに勢いよくぶつかり、その凄さに思わずウオツと唸ってしまいました。その後、津田に押し波、引き波が一〇回程度押し寄せているうちに、ついにつないであった綱は切れてしまい、その材木はバラバラになって点々と散らばってしまいました。

私は、材木を見届けると、家族を避難させた裏山に戻りました。そこには心配して私の帰りを待っていた家族がいました。私は、恐怖のあまり震えが止まりませんでした。

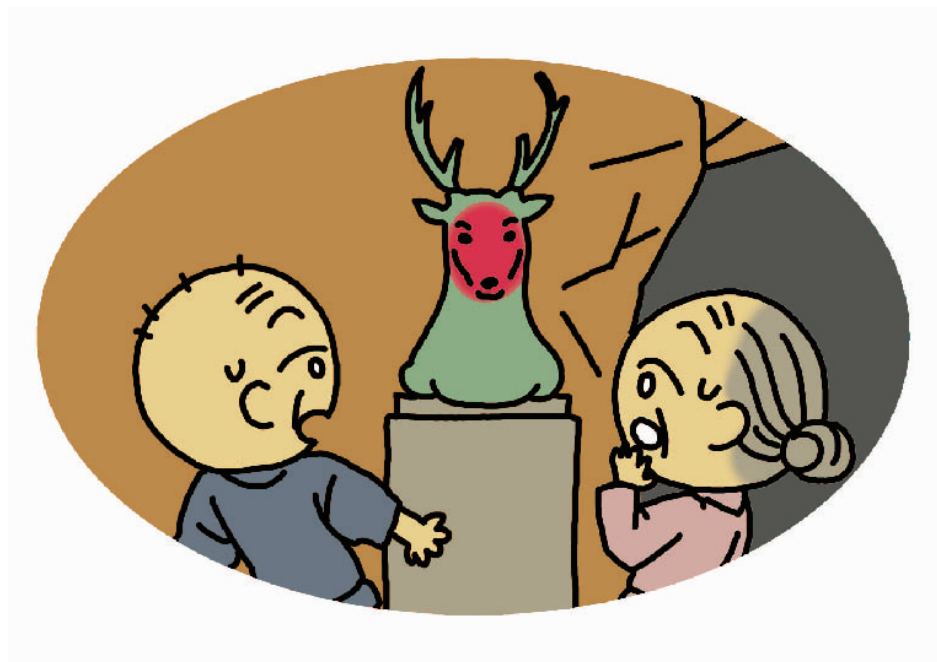


## 背景

津田は園瀬川と勝浦川に挟まれた中州にあたります。埋め立てが進んでいますが、いまでも木材工業団地になっており、前面の海域は貯木場になっています。津田山（標高78m）の津田八幡神社からは貯木場を一望することができます。

## アクセス 大野大橋（園瀬川河口）

- JR徳島駅より南へ直線距離約3km
- 徳島市西新浜町
- 緯度経度 北緯34度02分42秒，東経134度33分19秒



### 背景

昔、徳島の津田の沖合いに浮かんでいた亀島かみぼつが陥没して海中に沈み、島から避難した人が徳島の福島の築地に移り住んだと伝えられています。亀島が海中に没したのは、大地震のためであると言われていますが、その地震の時期については、正平16年（1361）6月18日に起こった正平の大地震、安政南海地震（1854）など諸説があります。かつて島があった所は、今ではお亀磯と呼ばれて、暗礁の上に灯台が建てられています。

### アクセス 沖洲港（亀磯灯台）

- JR徳島駅より東へ直線距離約5 km
- 徳島市東沖洲
- 緯度経度 北緯34度03分20秒，東経134度36分12秒



昔、徳島の津田から一里（約四キロメートル）ほど沖に亀島という小島が浮かんでいました。島にはたくさん漁師が住み、漁家が千軒あるということから、「お亀千軒」と呼ばれていました。島の中ほどに大きな洞穴があり、そこには神様をお祀りまつしていました。穴の前には銅で作った鹿が置かれていて、狛犬こまいぬのように神様の場所を守っていました。

この洞穴の近くに、信心深い爺さんと婆さんがいて、毎日お参りをしていました。ある晩のこと、夢枕に神様が立ちました。

「爺と婆よ、これからは、お参りする時には必ず鹿の面を見よ。もし鹿の面が赤くなるようなことがあれば、島が沈む前兆であるから、一刻も早く島を立ち退くように」

正直な爺さんと婆さんは、それ以来、毎日神様にお参りすることに鹿の面を見ていました。これを見て、一人の若者が夜中にそと鹿の面を紅殻べにがらで真っ赤に塗りました。夜が明けて、お参りに来た爺さんと婆さんは驚きました。

「島が沈む。はよう逃げないかん」と島中に知らせました。

その話を聞いて、急いで港を出る者もあり、その様子を見て面白がる者もいました。爺さんと婆さんは「もう島を出る者はいないか」と何度も呼びかけ、最後の舟に乗って島を離れていきました。しばらくすると、島が揺れ、高い波が島を被い、島は海の中に沈んでいきました。



昭和二十一年（一九四六）の南海地震の時に、川に泊めた船の中で泊まっていた人の体験談です。

新町川に泊めてある船が私の住まいである。その晩も私は船の上で眠っていた。明け方、船が大きく揺れた。「風もないのに、えらい波じゃの」その時、私は津波のことは少しも思いつかず、そのまま眠ってしまった。しばらくすると、「プツン」という音がした。船をつないであるロープが切れる音である。「只事ならぬことが起きている」咄嗟にそう思った私は慌てて外に飛び出した。私は、そこで想像を絶する光景を目の当たりにした。普段はほとんど流れのない川が上流へ激流となって流れているではないか。

私に乗せた船は、流れのなすがままに上流へ流されていった。「何が起きているのだ」私の頭は混乱していた。ようやくかちどき橋に船の上の部分がひっかかって止まった。ところが、次から次へと流されてくる船が、かちどき橋でだんご状態になりはじめた。私はかちどき橋が落ちるのではないかと不安になり、船につないであった小さな舟に飛び移り岸へ逃げようと思った。しかし、小さい舟はすぐに波に覆われ沈みそうになった。私は急いで、大きい船に飛び乗った。その瞬間、小さい舟は、流れてきた木材に押しつぶされて、「バリバリ」と音を立てて沈んでしまった。

呆然とばらばらになった小舟の破片を眺めていると「ミシミシ」という音が聞こえてきた。今度は飛び乗ったこちらの大きな船も、他の船に押しつぶされそうである。「もう駄目だ」と思った時、三トンのはしけ船が私の船に突っ込んで来た。私は慌ててはしけ船へ綱を伝って上がり、はしけ船からかちどき橋に上がり川岸にたどりつくことができた。

### 背景

かちどき橋は、徳島市街地を流れる新町川にかかっている橋で、昭和16年（1941）に完成しました。この橋の南詰めの交差点は、徳島と松山を結ぶ国道11号の起点にもなっています。また、昔は新町川には多くの船が係留され、沖合いには貯木場があり、周辺から集められた材木がいかだを組んで保管されていました。

船に乗っている時は地震の揺れが分からないので、津波の発生には注意が必要です。

### アクセス かちどき橋（新町川）

- JR徳島駅より南東へ直線距離約1 km
- 徳島市中州町
- 緯度経度 北緯34度04分01秒，東経134度33分25秒



江戸



## 背景

那賀川は「阿波の八郎」と言われるほどの暴れ川で、かつて沿川では頻繁ひんぱんに洪水に見舞われました。阿南市羽ノ浦町には大きな広間を持つお寺があり、この広間の畳は洪水の氾濫を防止する道具として使われてきました。那賀川の水位が上昇すると、地域の人々が畳を持ち出し、堤防の上に畳を横に立て並べて、裏に土俵を積むなどして畳の堤防を築きました。

畳が庶民に普及し始めたのは江戸中期以降とされていますが、一般の農民の手の届くものではなかったようです。このため、地域の人々が共同で負担してお寺の広間に畳を敷いたり、庄屋などが地域のために提供していました。

## アクセス 観音寺

- 那賀川橋北詰より北東へ直線距離約1 km
- 阿南市羽ノ浦町古庄宮ノ後78
- 緯度経度 北緯33度56分45秒, 東経134度37分48秒



阿南市羽ノ浦町古庄の那賀川沿いに、観音寺というお寺があります。普通、お寺の広間は板の間ですが、このお寺には広大な畳の間があります。普段は住職だんかが檀家の人々などに教えを説いたり、仏事の行事をしたりするのに使われる場所です。

じつは、この大広間の畳は、かつては水防のためにも重要な役割を果たしていました。大雨が降り、那賀川の水位が七分水（堤防高の七分目ぐらいの水位）になると、地域の人々がお寺の畳を堤防に運んで、洪水に備えたそうです。この地域には水防活動の用語として「百畳敷」の言葉があつたと言われています。また、付近の旧庄屋敷でも普段、集会所として使用できる広間の畳を、水防用に確保していたと伝えられています。

畳は日常生活にとって大事なもので、水害時には濡ぬらさないように二階や高いところに上げられます。それにもかかわらず、お寺や庄屋さんの大切な畳が水害時に洪水から堤防を守るために使われていたのです。地域の水防活動の拠点としてお寺が活用されていたことや、村人のために庄屋さんが果たしていた献身的な役割を知ることができます。







古毛の大岩の標識▶

### 背景

天明7年(1787)、那賀川の氾濫により、古毛村など那賀川下流の村々では田畑が流されるなど、大きな水害に見舞われました。古毛村の庄屋・吉田宅兵衛は洪水から人や田畑を守るため、堤防をつくろうと考えました。下流の村々とも話し合い、藩に堤防工事の許しをもらい、工事を完成させました。しかし、その後も堤防が壊れることが度々で、人々は堤防を万代まで末永く守るために工夫、努力をしてきました。

### アクセス

#### 万代堤の碑

- 持井橋より東に約1kmの北岸堰北詰
- 阿南市羽ノ浦町古毛
- 緯度経度 北緯33度56分38秒, 東経134度35分11秒



万代堤は、山間部から平野に出て右に曲がる那賀川が正面にぶち当たる位置にあります。万代まで続けという思いで造られた万代堤ですが、その歴史には紆余曲折がありました。

天明七年(一七八七)の大きな水害の後、古毛村(現在の阿南市羽ノ浦町古毛付近)の庄屋・吉田宅兵衛は、洪水から人や田畑を守るため、那賀川に堤防をつくろうと考えました。下流の一四の村を回って計画を話すと、どの村の庄屋も賛成してくれました。このため、宅兵衛は藩に堤防工事の許しを願い、藩から許可を得ることができました。

工事中には大水が出て、築堤中の堤防が流されたこともありましたが、下流の村々の人々はそれぞれが受け持った場所で一生懸命工事を進め、ついに堤を完成することができました。長さ五九四間(約一、〇七〇メートル)、底幅二四・五間(約四四メートル)、高さ三間二尺五寸(約六メートル)、天端幅四間(約七・二メートル)の堤でした。

この堤は当時の阿波の国では一番大きな堤防でしたが、文化元年(一八〇四)の大洪水により崩れてしまいました。このため、人々は堤防修理を始めました。この堤防は藩の命令で「万代堤」と名付けられ、人々は今度こそ洪水に負けない頑丈な堤をつくろうと努力し、万代堤を完成させました。

万代堤の完成後も洪水により堤が壊れることは度々でした。このため、庄屋の吉田家の人々が中心になり、村人が力を合わせて、水勢を弱めるために牛柵(水の流れの向きを変えたり、堤防への水当たりを弱めるために堤防から川を中心に向かって出した構造物(水制)の一種。丸太で組んで作った柵を石を入れた籠で押さえた構造物)をつくったり、大岩による水制(水制)を設けるなど、堤を守るために工夫、努力を重ねてきました。



▲城山神社に奉納されている絵馬

## 背景

昔から「寅年は荒れる」と言われてきましたが、慶応2年（1866）も寅年でした。8月5日から降り続いた雨は、約80年前の天明以来、最大の洪水を引き起こしました。那賀川の南岸では、阿南市上大野から富岡に至るまで各所で堤防決壊や家屋流失などの大被害が生じ、阿南市富岡では30名以上の生命が失われたと記録されています。また、那賀川の北岸では、羽ノ浦町古毛の万代堤が200間（約360m）以上にわたって決壊し、古毛の家々が流失したと言われています。

## アクセス 城山神社

- 持井橋より南へ直線距離1.5km
- 阿南市上大野町
- 緯度経度 北緯33度55分33秒，東経134度34分43秒



那賀川の奥に降った雨が一気に下流を襲ってきました。土手も藪も流して行きました。代々お医者様の岸玄硯先生の家は大野城のふもとにありました。那賀川の水位が上がり、さすがの大きな家も浮いてしまいました。大量の雨水を含んだ大きな葦葺きの屋根の重さのために、家はひっくり返り、バリバリと音を立てて壊れていきました。この時、天の助けか、八畳の天井板がポツカリと目の前に浮かびました。

玄硯先生夫婦、幼い二人の子、年老いた両親、親戚の娘さん、そして婆やさんの八人は天井板に乗り、洪水の中を流れに身を任せて流れて行きました。那賀川の本流は逆巻く流れでしたが、大野辺りになるとゆつくりと流れ、下大野になると八貫から岡川へと流れが変わり、西方の八幡様の馬場の松の枝にも手が届くかとも思われるように流れて行きました。

八人は手を合わせ、普段信仰している城山神社を伏し拝みました。すると、流れること一里（四キロメートル）ようやくにして助かりました。

流れ着いた所は立善寺村（現在の阿南市宝田町）でした。九死に一生を得た家族の歓びは何物にも代えることはできなかつたと思います。家族の歓び、神仏の加護のありがたさを表すために、玄硯先生は漂流の姿を大きな絵馬に仕上げて城山神社に掲げました。



明治・大正

## 背景

明治25年(1892)に那賀川上流の現在の長安口ダム貯水池付近にある高磯山(那賀町)が崩壊しました。崩れた土砂は那賀川の河床から110mもの高さとなり、那賀川をせき止めました。その後、土砂にせき止められていた川の水位が上がり、とうとう水が一気に下流を襲いました。上流で土砂が那賀川をせき止めた様子や土砂崩壊の情報は、飛脚や半鐘などにより下流に伝えられていました。この話は、当時の那賀川最下流の阿南市での様子を描いたものです。

## アクセス 楠木神社

- 持井橋より南東へ約2km
- 阿南市中大野町
- 緯度経度 北緯33度56分07秒, 東経134度35分28秒



明治二五年(一八九二)八月一日、降り続く雨のため、那賀川の水かさはどんどん高くなっていきました。高いところにある屋敷の家でも、一軒一軒が孤立してしまいました。

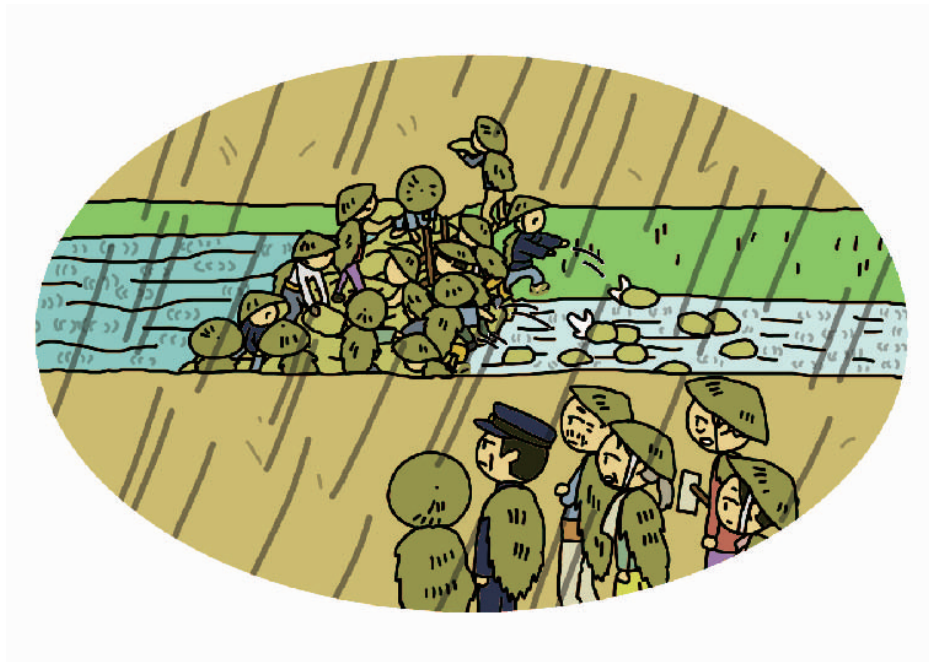
ところが、午前八時頃、あれほど上から押し寄せていた那賀川の水が引いていきました。人々は、なぜ那賀川の水が引いていったのだろうと心配になりました。情報は飛脚によって伝えられました。水が引いたのは那賀川上流の高磯山が崩れて、那賀川をせき止めたためで、せき止めたところより上流は湖になっている、木頭、坂州は水の底など、うそとほんとの情報が入り混じって大騒動になりました。

上流の土砂はいつまで那賀川をせき止めているのだろうか。大水が流れるようになったら、上の村から下の村に半鐘を打って知らせることになっていました。いつ半鐘が鳴るのだろうか。一日一日待っていました。

ついに、その日が来ました。八月四日午後二時、濁流が村々を飲み込む勢いで襲ってきました。あたり一面、泥の海になってしまいました。阿南市中大野の楠木神社には、大水から逃れるために三人がよじ登ったと言われる楠が今も残っています。

八月五日の午後七時になって洪水は引いていきましたが、後には泥をかぶった稲、野菜、牛馬のえさの雑草が残りました。その年、牛馬の餌にする稲わらは、水で洗って食べさせたとされています。

かつては堰をめぐる深刻な上下流の対立が生まれるほどの  
 濁水があったことを知ること



桑野川に一の堰が造られたのは、寛永一五年（一六三八）のことです。この堰のおかげで、下流の水田に水を引き入れることができるようになりました。その反面、堰上流の地域では、大雨の度ごとに浸水被害が頻発しました。このため、堰上流の人々は一の堰の改修について大正の中頃から政府に陳情を重ねてきましたが、改修は実現しませんでした。事件が起こったのは、室戸台風で大被害が起こった昭和九年（一九三四）から二年後の昭和十一年でした。

この年の夏は、八月一日頃から連日雨が続いたため、低地部では浸水が続き、その上台風が接近して来ました。八月二六日、降りしきる豪雨の中、半鐘が乱打されます。蓑笠の人々が、決死の気持ちで一の堰に集まってきました。浸水被害に遭っている上流の農民たちが一の堰を壊したのです。皆無言です。見守る下流の見能林の農民たちも無言です。警察官もただ見ているだけです。

一時間たち、二時間たつて、やがて上流の水が下がりがけました。上流の農民の目的は達したのです。意気揚々と郡八幡神社に引き上げていきました。樽酒があげられ、冷や酒で祝杯があげられました。代表者二、三人が一晚警察に留置されましたが、皆無事に帰宅しました。

川にはそれまで堤防がありませんでしたが、この事件を境に、堤防がつくられ、昭和三五年（一九六〇）に完成しました。また、新たな一の堰は昭和二八年に下流に造られましたが完全ではなく、三代目の立派な一の堰ができたのが昭和四三年でした。事件以来三二年たっていました。

昭和三〇年代以前

## 背景

桑野川の一の堰は、牛岐城主の賀島政重が寛永15年（1638）幕府の許可によって造ったと言われています。長さ20間（約36m）、堤底10間（約18m）の一の堰が完成し、富岡東部、見能林、津ノ峰の七百余町歩（約7km<sup>2</sup>）の水田に水を送ることができるようになりました。しかし、この堰のため、長生から桑野までは、大雨の度に田畑から屋敷まで水の底になることが度々になり、年に5回も6回も洪水になった年もあったと記されています。

## アクセス 一の堰

- JR阿南駅より西北西へ直線距離で約1.2km
- 阿南市富岡町
- 緯度経度 北緯33度55分18秒, 東経134度39分00秒





## 背景

徳島県南部、高知県西南部、愛媛県南部などのリアス式海岸に見られるV字型の入江では、他の地域よりも地震後の津波が大きくなることが想定されます。このことから、「地震後は早く、高い所に避難すること」が導き出されます。このような経験や言い伝えから学んだことを後世の人に伝えることは重要なことです。この話は、阿南市見能林<sup>みのばやし</sup>に嫁いだ女性が義父から教えられた地震後の心構えを大切にしたいために、津波から家族みんなの身を守ることができたという体験談です。

## アクセス

船の打ちあがった付近（打樋川）

- JR見能林駅より南南西へ直線距離約1.5km
- 阿南市見能林町
- 緯度経度 北緯33度53分20秒，東経134度39分50秒



昭和二年（一九四六）一月二日未明の南海地震の時のことです。グラッ！グラッ！突然襲った地震に、私は今まで経験したことのない大きな衝撃を受け、ただならぬ危険を身感じました。津波が来る、必ず津波がやって来ると思いました。私は子どもたちを素早く戸外へ連れ出し、モチの木に皆でかかえつきました。早くどこか高い所へ避難しなければと思い、家族に身仕度をさせ、塩・味噌・米など非常食品を持って、近所の高いお家に避難させてもらいました。

その直後、暗闇の中に、津波の轟音<sup>ごうおん</sup>が聞こえてきました。時間がたち、夜も明け、私たちが家へ帰って来たところ、家、家具、収穫したばかりのお米など、ありとあらゆる物すべてが泥まみれとなり、眼も当てられぬ有様でした。また、家の前の道路には、二〇〇トン級の船が打ち上がっていました。

時間が経つにしたがつて、お隣の人も、避難先から帰って来て、無事であったことを共に喜び合いました。こうした未曾有<sup>みそろう</sup>の出来事の中に、一人の怪我<sup>けが</sup>人も出なかったことは、今は亡き父の日頃の教訓のお蔭なのです。

私がこの家へ嫁<sup>よめ</sup>いで来た時、父からくれぐれも次のことを注意されました。この土地は前が海であり、ましてV字型の入江であるので、もし地震があった時は、必ず津波が来ると思い、高い所へ避難すること、他の地域より潮位が高くなること、また戸外へ出たら、木の根元に避難することです。これはこの地方は沼地であるため地盤が軟弱なので地割れの心配があるそうで、この注意はお隣の人たちにもいつも言っていました。こうした年長者のちょっとした注意や言い伝えは、若い世代へ言い残しておきたいものです。



敗戦から間もない昭和二十二年（一九四六）の南海地震により、敗戦、地震、津波の三重苦を体験した人の話です。

「津波を知る人がいなくなった頃、津波が来る」と祖母から聞かされていました。昭和二十一年一月二日未明、不気味な地鳴りとともに大地震が起り、家を飛び出しました。焚き火で暖をとっていると、大波が国道を越え、怒濤渦巻きながらいろいろな物を運んできました。隣の納屋も木の葉のように猛スピードで流れていき、国道や堤防が次々と切断され崩壊していききました。浜田は泥沼の海になりました。それはほんの一瞬の出来事でした。地震や津波の計り知れない自然のエネルギーを前に、私はただ茫然と眺めるだけで、放心状態でした。

鵜地区が地震によって受けた致命的被害は、地盤沈下です。南海地震によって室戸岬付近が隆起し、他は全般的に沈降しました。海水の高さから考えると、地震前より五〇センチメートル位沈下したと言われていました。

沈下分を取り戻す嵩上げ工事が始まりました。まず、嵩上げに使う土を得るため、山へ行ってスコップによって表土を取り除き、山土をツルハシで掘ります。そして土を大八車で運搬するという、現代では考えられない全て人力の作業であり、その上寒中の氷が張る水中での作業で、本当に大変でした。

工事は昭和二八年（一九五三）頃まで続きましたが、沈下分を取り戻すことはできませんでした。以後、何年にもわたり何回も嵩上げ工事が繰り返され、農家の労力に加え、精神的、経済的負担はあまりにも大きく、長い間本当に苦しみました。

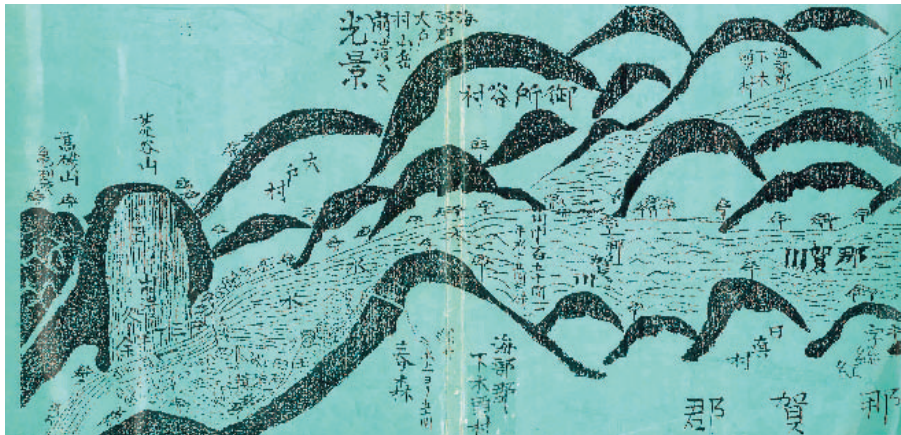
## 背景

阿南市鵜地区はV字型をした橘湾の湾奥部、福井川の河口に位置し、地震が発生すると、津波が猛烈な勢いで襲ってくる地形となっています。昭和二十一年（一九四六）の南海地震の時にも、この地に津波が大きな被害をもたらしました。その中でも深刻な被害は地盤沈下でした。地盤を元の高さに戻すため、地域の人々は人海戦術で大変な苦勞をしながら嵩上げ工事を行いました。

## アクセス 鵜橋（鵜川河口）

- JR新野駅より北東へ直線距離約3km
- 阿南市橘町鵜
- 緯度経度 北緯33度51分26秒、東経134度37分38秒





▲高磯山の大崩壊の絵図  
(西崎文庫蔵書「諸県変シ全」)



平谷八幡神社▶

## 背景

明治25年(1892)7月25日、台風による暴風雨で、那賀町大戸の高磯山(611m)が大きく崩壊しました。流れ出した土砂は那賀川を越えて対岸の春森まであふれ、那賀川の河床から110mの高さに達しました。この土砂によって那賀川は流れをせき止められ、ダムとなってしまいました。せき止められてから二日後、とうとうダムとなった箇所が決壊して、大水となって下流を襲いました。この話は、高磯山よりも上流にある平谷の薬師堂がせき止められた水によって移動したときの話です。

## アクセス 妙法寺薬師堂

- 平谷小学校の南すぐ
- 那賀町平谷
- 緯度経度 北緯33度47分39秒, 東経134度18分07秒



高磯山の大崩壊によりせき止められた那賀川の水は、上流の辺り一面を水没させました。平谷村(現在の那賀町平谷付近)にある妙法寺も水の底に沈んでしまいました。妙法寺の住職は本尊の観音様や薬師如来様を抱いて、命からがら上ノ内まで避難しました。しかし、建物まで持っていくわけにはいきません。本堂や、お堂など、古くからあった立派な建造物は、ほとんど流失してしまいました。お薬師様をまつていた薬師堂は、水に浮き、だんだん奥の方へ逆流していく水に乗り、現在の平谷八幡神社の上のあたりまでプカプカと浮かんでいってしまいました。

せき止められた水の量はますます増えて、現在の長安口ダムの約一・五倍もの量になってしまいました。さすがに川の流れをせき止めていた土砂も水圧に耐えられなくなり、七月二五日後二時頃から崩れ始め、四時にはついに決壊してしまいました。

平谷でも水がひき始め、たくさんの方の家の残骸や避難させることのできなかつた牛や鶏などの亡骸が、下流へ向かって流されていきました。その時、不思議なことが起こりました。八幡神社まで流されていた薬師堂が、プカプカとり山の方へ向かって戻り始め、水がひくのに合わせて、ドンと元の位置にすわってしまいました。住職が上ノ内まで避難させていたお薬師様も、無事に再びこのお堂へ安置することができました。



昭和二十一年（一九四六）の南海地震後、私はすぐに服を来て階下に下りました。まもなく母や祖母が妹や弟たちに服を着せ終わりと、皆玄関の部屋に集まりました。玄関口の板間には収穫し乾燥を終えたばかりの籾を入れたかますが並べられていました。その頃は食糧難の時代で、母と祖母は「これを二階に上げると逃げよう」と言いました。その時です。外から伯母が雨戸を叩いて「津波が来るぞ、はよう逃げえよ」と声をかけ、足早に走り去っていきました。

母から「子供らは先に逃げとれ」と言われ、私が入り口の障子を開けた途端にドーン、ザーという音とともに、雨戸と雨戸の隙間からいつせいに海水が吹き出してきました。「みな早う二階に上がれ」と言う祖母の声に、母は籾の一杯詰まったかますを持って階段を駆け上り、みんなも続きました。

階下の様子を見に行った母は「階段の上近くまで波が来とる」と言う。祖母は「もうあかんやわからん。死ぬんやたらみんな一緒や」と言って、七人が輪になって手を握り合いました。

真つ暗な中で、ドーン、ドドーンと家に何かが打ち当たる音が数回続いて聞こえた瞬間、突然家が崩れるように倒れ、家に押し潰されるようにしてみんなが水中に押し込まれました。

近くにいたはずの家族の姿は一人も見えず、無我夢中で水の中をさぐり、手に触ったものを引っ張り上げました。弟や妹たち三人は間近におり、祖母も少し離れて浮き上がっていましたが、母と叔母の姿は見当たりませんでした。

あの時に欲を捨てて、すぐに逃げていればと今までに悔やまれます。

背景

昭和21年（1946）の南海地震と津波は牟岐町に大きな被害をもたらしました。当時は食糧難の時代で、収穫し終えた後の籾は貴重なものでした。この話は、籾を入れたかますを二階に上げてから逃げようとしたために、母と叔母を亡くした家族の話です。地震後、津波に備えて、一刻も早く逃げていれば、二人の命は救われていたかも知れません。

アクセス 南海震災史碑

- JR牟岐駅より南東へ直線距離で約1 km
- 牟岐町灘字大牟岐田 児童公園内
- 緯度経度 北緯33度39分59秒、東経134度25分39秒







昭和九年（一九三四）に室戸台風を牟岐港で宿直していた時に体験した人の話です。  
 「ラジオで大きな台風はこっちへ来よると放送していたが、何処も静かなもんや」と言って、先輩が上がってきました。暑い夜でした。窓を開けると、星がキラキラ光っていました。昭和九年（一九三四）九月二〇日夜、私は牟岐西浦漁協の建物の二階で二人の先輩とともに蚊帳かやの中で横になって雑談していました。しばらくして、南側の窓ガラスが一枚割れ、蚊帳が揺れました。まだ電灯はついていました。外を見ると、前の揚場あけばの屋根に二階屋根の雨樋が垂れていました。それが急に舞い出し、ガラス窓を叩きました。ガラスは割れ、前の屋根瓦がめくれて、何もかも一緒になって座敷に次々飛び込んできました。「ごっついぞ」と三人は真っ暗闇の中、懐中電灯の光で一階へと右往左往うおうさおうしました。突然、ドドドドッと建物全体が揺れました。外が見え出し、風雨も少し納まりおさまりました。外に出ると、低地に海水がとどまっていました。事務所西隣の家の二階屋根に加工場の棟木むなぎが二本、矢のように打ち込まれていました。  
 土堤どていの松並木はほとんどが折れ、残った枝にトタンがタオルをかけたように垂れていました。浜の加工場は全部飛ばされていきました。まるで広い河原が広がっているようでした。築堤ちくてい中の中央突堤が崩れていました。

## 背景

室戸台風は、昭和9年（1934）に日本列島を縦断し、大きな被害をもたらしました。9月21日5時10分に室戸測候所で観測した最低気圧は911.9hPaで、当時の世界記録を破る強烈な台風であったために、室戸台風と命名されました。上陸後も中心気圧が低かったため、風が非常に強く、最大風速は室戸で西風毎秒45m、徳島で南東風36.7mを記録しています。台風は本州を時速70kmもの速さで北東に進んだため、風は経路の南東側で特に強く、この強い南偏風のために大阪湾を中心に著しい高潮が発生しました。

## アクセス 牟岐港

- JR牟岐駅より南東へ直線距離で約500m
- 牟岐町中村
- 緯度経度 北緯33度40分02秒, 東経134度25分18秒





## 背景

昭和21年（1946）12月21日午前4時19分、マグニチュード8.0の南海地震が発生しました。海陽町の浅川湾は典型的なV字型湾で、地震発生から十数分後には大津波が来襲し、死者85名、家屋の全壊364戸、流失44戸などの被害をこうむりました。この話は、持ち物を準備していたことから逃げ遅れ、津波が押し寄せる中を逃げた家族の話です。浅川港には「お母ちゃん行けんもん」の石碑が建立され、この時の教訓を後世に伝えています。

## アクセス

### 震災後50年南海道地震津波史碑

- 海陽町浅川出張所前
- 海陽町浅川字川ヨリ東26-4
- 緯度経度 北緯33度37分29秒、東経134度21分46秒



昭和二十一年（一九四六）の南海地震で二人の子を亡くした母親の体験談です。

地震が揺ったさかい、「もうやむんかいな」、「家がつぶれるんちやうかいな」ほんなことばかり考えながら部屋で子供に添え乳させよった。おとうさんが、「井戸の水もようけ有るし、浜へ行ったけど誰っちゃおらんわ。静かなもんじゃわ」と言う。おては（私は）あわせ 裕あわせの着物を何枚か持ち、「ちよつとでも食べる物持っていたろ」思つて、袋に米入れて出て行きかけた。

ほいたところが、近所は、皆逃げてしてもおらんのもん。ほんで、びっくりしてお隣さんに早よう逃げるよう言うたつて出て来たら、うちの前にはまだ水がなかったけど、駒沢の前へ行ったらもう水がザブザブしとつて胸まで上がつてきた。それが一番最初の潮やつたんや。持つていつきよつた物はみんな駒沢の前で捨ててしもた。

長女が四女を負うて行つきよたんやけど、「おかあちゃん行けんもん」言うやろ。行けんはずや、柴から材木から道具からが、じょうさん（たくさん）流れてきとんやもん。暗いし、いろんな物は流れてきよるし、あとへ戻つたること、どうする事もできん。

ほの後の波に乗つて次女と三女は駒沢の屋根に上がつて助かった。長女は四女を負うとるし、ねんねがびしょびしょになつとるから、からだか重とうてよう上がらんかつたんやろ。

潮が干いて町へ出て行くと「ばあやん、おめくの（あなたの家の）子が死んどるで」言うやんけ。長女と四女が西の町で死んどつた。下の子はねんねこから抜けて、二人が近くで死んどつた。おて（私）が行つた時には、もうお寺に運ばれとつた。「この子らを熱いお風呂に入れたつたら生き返るんちやうかいな」と思つたら入れてやりたくてたまらなんだ。一度に子供を二人も失うてもうた。



▲観音庵への階段



▲安政南海地震 津波来襲地点の石標



◀昭和南海地震 津波来襲地点の石標

## 背景

昭和21年（1946）の南海地震の時に、自宅とは別の旅館で宿泊客の世話をしていた夫が、妻と子どもたちの安否を気遣い、浅川の自宅付近に戻りました。子どもたちは無事山に避難していましたが、妻は亡くなっていました。一旦、家から逃げたものの、荷物を取りに帰ってきて津波にのまれたようです。この話は妻を亡くした夫が語る体験談で、地震の後は早く逃げるのが大事だと言っています。

## アクセス 観音庵

- 海陽町浅川出張所より北へ約200m
- 海陽町浅川
- 緯度経度 北緯33度37分37秒，東経134度21分42秒



昭和二十一年（一九四六）の南海地震で妻を亡くした夫の体験談です。

地震の時、わしの旅館にはちょうど森繁久彌さんが来とって、二階で寝よった。森繁さんに「ここで夜が明けるまで動かれんぞ。わし、帰るわ」言うて、浅川の自宅に自転車で向かった。浅川の端へ来たら、ドーと波が来て、大きな貨物船や機帆船きはんせんが流れてきよった。それが一番最後の潮やった。夜を明かし、胸まで水に浸かってようやく自宅にたどり着いた。

家の辺りは流れてしもとった。わしは子供を捜した。無事山へ逃げとった。「お母さんはどうしたんな」と聞いたら、「お母さん見えん」という。「もしかしたら、やられとるかも分からん」と思うて下へ降りたら、いとこが「おまえくのお母さんみたいな人が死んどる」というて初めて分かった。浜にようけ積んであつた材木がどつと流れて来て、家内はそれに足をとられて死んどった。逃げる時、上の子が下の子を負うて家内も一緒に逃げたんやけど責任感の強い女で、「おとうさんもおらんし、こら子供のもん持って逃げとらんいかん」思ってもどつて来たんやろ。

ここの人は天神さんに逃げたんやけど、三回か四回波がきた。天神さんの石段の一番上まで波がきとつた。津波というもんは、浜で渦のようにまうもんらしい。ほれに、二階建ちの家が下をとられてしもて、そのまま二階がパタンと落ちてしもたり、えらいもんやな。

あんな大きい地震や津波の時は、「はよう逃げ、はよう逃げ」というたらないかんけど、中には「こんな所まで津波が来るか」という人もおる。ほんやけど、そんな時は素直に人のいうことを聞いて逃げるがええんではないかと思う。



私は、物心がついた幼少の頃から高校生になる頃まで、両親から、寝る時には必ずズボンや服などを折りたたんで枕元に置き、いつでも着て逃げられるようにしておくように、しつこく言われ続けてきました。それは、両親が昭和の南海地震で次のような体験をしたことに基づいた教えでした。

「……昭和二十二年二月二日、今まで経験したことのないドーンという音とともに、大きな縦揺れで目が覚めた。すぐに大きな横揺れで家がぐらぐらと揺れ始め、タンスは倒れ、家中の物が落ち、今にも家が倒壊しそうになった。海からはゴート、今までに聞いたことのない不気味で大きな音が聞こえてきた。外からは「津波だ、早く山に逃げる」と怒鳴り声<sup>どな</sup>が聞こえた。着の身着のまま外に出ると、屋根瓦の落ちる音、家屋の崩れる音があちこちから聞こえてきた。

荷物を持ち出す時間も余裕もなく、また避難する人々でパニック状態の中、三ヶ月の乳飲み子と三歳の子どもを抱きかかえ、また後には四人の子どもを従え、暗闇<sup>くらやみ</sup>の中を近くのけわしい山道を必死に駆け上がった。避難したが、どこをどのように避難したのかはほとんど記憶がない。

百メートルほど登ってやっと我に返ったが、恐怖と寒さのため体の震えが止まらない。しばらくは話すことも立つこともできなかった。……」

南海地震を経験した両親の貴重な教えを無にしないように、この話は子や孫にも語り継ぎたいと思っています。

昭和三〇年代以前

## 背景

昭和21年（1946）の南海地震を体験した両親は、その時の様子と教訓を子どもに伝えていました。災害体験やそれに基づく教訓は、語られなければ風化してしまいます。教えを思い出し、実行することにより、両親の思いは子に、孫に伝えられていきます。この話は、親など身近な人が、災害体験を後世に伝えることの大切さを物語っています。

## アクセス 津波十訓の石碑

- 海陽町浅川出張所より南西へ約200m
- 海陽町浅川
- 緯度経度 北緯33度37分24秒、東経134度21分41秒



江戸



震潮記▶

### 背景

「震潮記」は、ししくい穴喰の組頭庄屋田井久左衛門宣辰(1802~1874)が、穴喰を襲った地震・津波の様子を記したものです。この中には、永正9年(1512)、慶長9年(1605)、宝永4年(1707)、嘉永7年(1854)の記録が記されています。平成18年には、子孫の田井晴代氏はるよが津波時の救命の一助になればとの思いで、現代語訳を刊行されました。ここでの話は、「嘉永七年十一月五日震潮日々あらましの記」より、津波に備えて昔の人がかがり火を焚いたなど多くの教訓が述べられています。

### アクセス

愛宕神社

- JR穴喰駅より東南東へ直線距離で約200m
- 海陽町穴喰浦
- 緯度経度 北緯33度33分55秒, 東経134度18分09秒



徳島県の南端、海陽町穴喰ししくいの田井家には、この地の過去の地震や津波の様子を記した「震潮記」が残されています。その一端を紹介します。

…嘉永七年(一八五四)十一月四日の午前九時、中揺りの地震が続いて二度あり、海面にわかには大波が立ち、あじ島を打ち越えて、川の中ほどまで潮が三度入ってきました。

人々は大変驚いて四方へ逃げ散りました。米麦や諸道具を山上へ持ち運び、今にも津波が襲って来る心地がして、大騒動となりました。

夜に入ってから同じ騒ぎは続きました。万一、出火するかも分からないので、役人達は火の用心の警戒に回り、浜辺ではかがり火を焚いて、潮に異変があったならば、知らせるよう手配しておきました。家々に残っている者たちは、知らせがあれば少しづつ身の回りの物を持って、愛宕山あたごやまへ逃げのぼるという覚悟で、浜辺より今にも知らせが来るかと心細くも待っていました。そこへ、夜一〇時ごろ中揺りの地震が一度ありました。

家々に残っていた者も大半は逃げ去り、道具も持ち運び騒々そうそうしくなりました。また、浜辺には潮の異変に気を付け、かがり火を焚いており、あちこちに逃げ退いていた者は、かがり火が消えたならば、津波が押し寄せて来ると思って、本当に薄氷を踏むような思いで心細く、遠見から見守っていました。

明け方になって、一息つき、翌五日、潮の異変も少しばかりは直り、地震も穏やかになったので、あちこち逃げていた人々は、諸物を持っておいおい戻ってくるような状態で、これで少しは穏やかになりました。……